

第8回中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い

村中 信行

中国から三人を迎えて開催

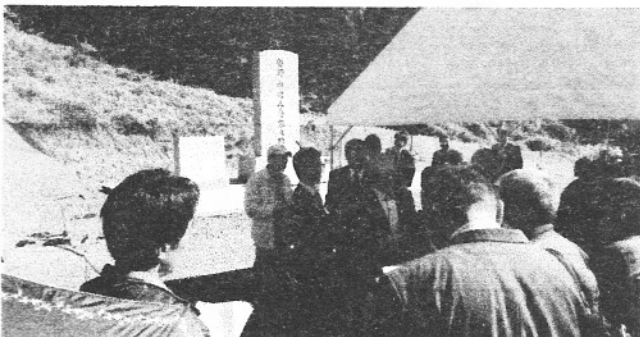
雲一つなく真っ青に晴れ渡った秋晴れの空のもと、安野での「中国人強制連行受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」は8回目を迎えた。枕詞としての「雲一つなく」ではなく、この日の空には本当に雲は見当たらなかった。西松安野友好基金による和解事業として被害者、遺族を安野の地に招いての追悼式は一昨年で終了したため昨年からは被害者、遺族の訪日団はなくなり、さらに今年は友好基金と「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」が共催する形での集いとなっている。昨年からは集いの開催日時を10月第3日曜日、13時30分からとし、今年は10月18日である。中国からは昨年同様、基金運営委員のうち曲啓傑さん、張振命さん、劉宝辰さんの三人が代表参加された。

「集い」の前に現地説明

集いは8回目を数えるけれど、今回初めて参加される人もかなりいたため、集いの開催に先立ち、杉原達さんと栗栖薫さんが安野における強制連行や強制労働



(上) 杉原さんの説明を聞く参加者
(下) 栗栖さんから当時の話を聞く参加者



について説明された。杉原さんは大阪大学大学院の先生で中国人強制連行の歴史に詳しく、安野の事件についても裁判闘争の頃から深く関わってきている。栗栖さんは収容所の監視員の息子として現地で子供時代を過ごし、当時の中国人たちの状況を直接見聞きした経験者だ。こうして安野の歴史が少しずつでも広がり、時間の経過の中に埋もれずに繋がっていくことは「集い」を毎年積み重ねていくことの一つの意味になるだろう。

澄み切った静寂のなかで「集い」が始まる

13時30分、黙祷から集いが始まる。それまでいささかざわついていたその場の空気が司会者（岡原美知子さん、通訳楊小平さん）の「黙祷」の一声で一瞬にして静まりかえる。安野の深い山々の澄み切った静寂が集いの参加者を包み込むかのようだ。

そして主催者として西松安野友好基金運営委員長の内田雅敏さんの挨拶。これまで安野に強制連行された360人のうち、271人を探し出したこと、このうち248人に補償金を支給することができたこと、また記念碑建立についての意義、そして



中国人受難者、遺族を過去6回にわたって日本に招き（その数は延べ199人）、追悼や強制労働の現場を巡る活動や交流を積み重ねてきたこと、昨年には「西松安野友好基金和解事業報告書」が発行されたことの報告がされた。その挨拶の最後は記念碑建立当初からの持論である「安野 中国人受難之碑」が「友好之碑」になることの願いで締めくくられたが、この日の晴れ渡った空とは大きく異なる不穏な空気が日中間に漂う今、この「願い」が切実に聞こえる。

続いて今年から集いの共同主催者となっている「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」の世話人代表篠原収さんの挨拶。その中には今年の8月5日に原水禁広島大会で「安野フィールドワーク」を取り組み、安野の歴史を伝えていく新しい試みの報告もあった。

張振倫さんは受難者・遺族の代表、邵義誠さんの挨拶



挨拶を代読された。西松建設による戦時中の強制連行、強制労働に対する戦後補償を求めて長い闘いを続けてきた受難者の代表であった呂学文さんがたおれられた後、代わって代表の役を務められてきた邵義誠さんであったが、やはり高齢のため数年前から娘婿の張さんが代理出席されるようになった。こうした変遷にも時間の経過が重く感じられる。

主催者挨拶の最後は西松建設の代理人弁護士高野康彦さんのメッセージで締めくくられた。

来賓として安芸太田町長の小坂眞治さん、善福寺住職藤井慧心さん、広教組委員長石岡修さんの挨拶を受ける。中国駐大阪総領事館副領事の周明輝さん、参議院議員森本真治さんからはメッセージが届いた。広教組には安野の強制連行問題の解決へ向けての運動が始まった当初から大変な支援を受けてきたし、善福寺さんは強制連行された中国人のたちと因縁浅からぬものがある。集いが終了した後は善福寺で追悼の法要も予定されている。そして私たちにとって実に心強いのが、地元自治体の安芸太田町の集いへの理解であろう。西松建設との和解が成立して集いが開催されるようになって以来、町長の小坂さんに参加していただき挨拶を受けているが、本当にありがたいことだと思う。地元の理解こそ歴史の継承の基だと思うのである。

その挨拶も「この碑建立の願いは、戦争による悲惨な過去を反省するとともに平和への誓いを新たに、二度とこのような過ちを繰り返すことのないよう日中両国の友好がさらに発展し、平和の輪がより広がることを願ってやまないものであります」「私たちは、今、ここに歴史を顧みて改めて受難者の皆様を心から追悼しその教訓を深く心に刻み、不幸な歴史を再び繰り返すことのないよう、両国の平和と友好の発展をさらに深めるよう努力していくことをお誓いするものであります」と歴史から目をそらさずに平和と友好へ努めようという真摯な姿勢が伝わってくる。

主催者挨拶、来賓挨拶が終わると、恒例となっている竹内ふみさんの二胡の演奏が始まる。安野の山に響き渡る二胡の音色が心地いい。安野で亡くなられた方はもちろんのこと、集いの参加者皆を慰めているかのような演奏に感じられる。



竹内さんの演奏を背景に参加者が記念碑に献花し、最後に記念写真を撮って集いは無事終了した。今年の参加者は69人ほどであった。



献花後、席に戻る（左から）篠原継承する会世話人代表、曲啓傑委員、劉宝辰委員

善福寺で追悼法要

集いが終わり、安野発電所からほど近い善福寺へ移動する。集いに参加した人の多くがここで行なわれる追悼法要にも参加するために移動してくる。これは僕の個人的な感想かもしれないけれど、こちらにくると何故かほっとして気持ちが緩くなる。住職の藤井慧心さんの人柄が醸し出す雰囲気は周りを安心させるのかしら、などと思う。

追悼法要での司会は川原洋子さんが務め、安野の被害者をはじめ強制連行され日本で死亡した中国の人たちの遺骨が納められているという天津の在日殉難烈士・勞工記念館についての紹介がされた。



法要に先立ち、焼香の仕方を説明する藤井住職と坊守さん

そして藤井住職の簡潔で軽妙な挨拶があった後、住職のよくとおる仏説阿弥陀経の読経の声を聞きながら線香をあげていく。善福寺での法要ではおなじみとなった中国式と日本式での焼香である。中国式は中国の長い線香を頭上に捧げて何度か礼をして鉢に立てていく（礼をする回数なども何回かの決まりがあるかもしれないけれど）。日本式は抹香を香炉に焚いていく。どちらも住職の心配りで用意されたものだ。

一通り焼香が終わると、中国から来日した西松安野友好基金の運営委員である曲啓傑さん、張振倫さん、劉宝辰さんが挨拶をされた。曲啓傑さんは安野で亡くなられた曲福先さんの甥に当たられる。福先さんは中国から突然いなくなり、家族は途方に暮れた、福先さんが安野のダム建設工事で強制労働をさせられ、この地で亡くなったということは、日本の支援の人たちから聞いて初めて知ったという話をされたが、聞いている僕たちにも胸に何か熱いものがこみ上げてきた。

福先さんの遺骨は戦後、一時的に善福寺に保管されていた関係もあって、啓傑さんと藤井住職とは縁があったようだが、「集い」を積み重ねる中での交流を通してその関係はさらに深まっているように見受けられる。こうした人間関係が深くなっていくことは小さいことかもしれないが一つの希望だと思う。

一昨年まではこの場で当時の様子をよく知る谷キヨコさんのお話を聞いたのだが、今年は高齢であることも考えて、参加者への紹介だけとなった。そして「継



谷キヨコさんにお土産の中国茶が手渡される

承する会」のスタッフの中に中土勝雅さんの姿がない。中土さんも中国人被害者が西松建設に戦後補償を求めた当初からの支援者だったが、やはり高齢となられ、参加が難しくなった。ここでも時間の経過を思わずにはいられない。

日本の上に「歴史修正主義」「排外主義」と呼ばずにはいられないようなどす黒い雲がかかる昨今ではあるが、安野の歴史はしっかりと刻まれていると思いたい。あちらこちらで引用されているし、今さらと思わなくはないけれど、やはり名言だと思うのでワイツゼッカーの言葉を最後に記したい。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも目をつぶることになります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」